

221. 近江の古代寺院研究の 基礎資料V

⑥東浅井郡びわ町下八木遺跡

下八木遺跡は琵琶湖北東岸の東浅井郡びわ町下八木地先に所在するという「まぼろし」の遺跡である。ここで「まぼろし」というその理由は、ひとつには遺跡についての情報が、「漠然と下八木出土」とされる軒丸瓦1点のみで、しかもその現物は所在不明のまま、瓦当の拓影のみが知られていたということ^①、もうひとつは北東約1kmの同町弓削に満願寺廃寺が所在し、かつ両遺跡の出土瓦が類似することから、たとえ瓦の出土地が下八木地先であったとしても満願寺廃寺から流入してきた可能性を否定しきれないということなどが考慮されるためである。

ところが最近になって下八木出土という、これまで知られていなかった平瓦が、びわ町立びわ中学校に所

蔵されていることが明らかになり、また所在不明であった軒丸瓦も滋賀大学経済学部史料館に所蔵されていることが判明した^②。その軒丸瓦の瓦当裏面のラベルには「昭和三十六年十一月一日 寄贈者 東浅井郡びわ町下八木 上野九右衛門」と記されていたので、これを手がかりとして、瓦類の出土地等の確認をおこなおうとしたが、残念なことに寄贈者はすでに亡くされており、家族の方や地元の史談会の方々も、このことについては記憶されていなかった^③。

そこでやむなく具体的な手がかりのないまま、現地踏査を試みたところ、次のような知見を得ることができた。遺物等の散布は明確でないが、一応、下八木遺跡の候補地として申し添えておきたい^④。

A：集落の南西部に「上堂立」「下堂立」の小字名が確認できる。

B：集落の中央部から北部にかけての、日吉神社の周辺には周辺の条里地割とは異なる、真北に近い地割が認められる。

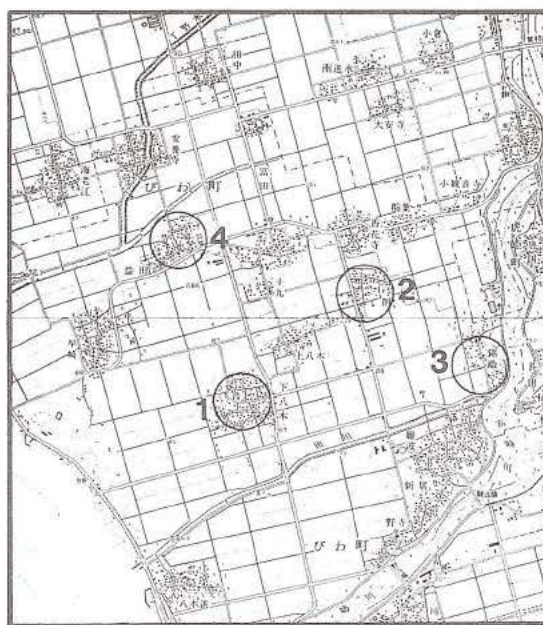


図1 下八木遺跡(1)と満願廃寺(2)の所在地および錦部郷(3)と益田郷(4)の遺称地

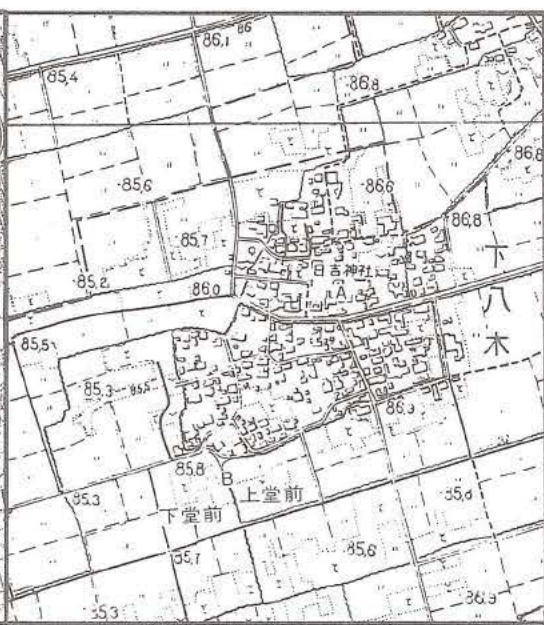


図2 下八木遺跡の候補地

最初にも触れたが、下八木遺跡出土とされる瓦類は、近接する満願寺廃寺出土の瓦類と類似している。ここでは以前検討した満願寺廃寺出土の瓦類^⑧と比較しつつ報告したい。

軒丸瓦(1)の瓦当文様は周縁に2重の重圈文をめぐらす復弁4葉の蓮華文で、中房には界線で画された「1+4」の蓮子を配す。花卉内には2つの子葉が存在し、それぞれの子葉には花卉輪郭線とは別に、それを取り囲む線が存在するため、あたかも重弁蓮華文かのような印象を与える。瓦範は周縁部までで、瓦当の厚みは中房部で4.7cmを測る。焼成は堅緻で、色調は灰黒色を呈す。この軒丸瓦は焼成や色調、瓦範の形状、それに瓦当の単位文様やその構成についても基本的には満願寺廃寺創建期の軒丸瓦A類と同じだが、相違することは下八木遺跡では蓮弁が4葉であるのに対し、満願寺廃寺では5葉であり、中房の蓮子についても下八木遺跡が「1+4」であるのに対し、満願寺廃寺では「1+6」で、しかも中央の蓮子に圈線がめぐっているということである。以上より、下八木遺跡の軒丸瓦は満願寺廃寺創建期の軒丸瓦A類の瓦当文様が退化したものといえてよく、時期的には新しく見たとしても白鳳期のうちにはおさまるものとしてよいだろう。

平瓦(2)は凸面に縦位の長大な縄目叩きを密に施すもので、凹面には粗い布目圧痕をそのまま残す。一枚作りと推定され、厚みは最大で1.7cmを測る。焼成は堅緻で灰黒色を呈す。この平瓦の諸特徴、とくに厚みが薄いということなどは、満願寺廃寺の平瓦C類に顕著に認められる特徴で、以前におこなった同廃寺の検討では第3期に位置付けたものである。時期的にはおそら

く奈良時代でも、新しい段階の所産と推測される。

以上の報告により、下八木遺跡は遺跡そのものが実在するとしても、満願寺廃寺とは近接した位置にあり、出土する軒丸瓦も満願寺廃寺創建瓦の退化型式であることが明らかになった。そこでこれらのことを考慮して下八木遺跡の壇越となりうる可能性のある氏族を考えた場合、やはりその第一の候補としては満願寺廃寺の壇越と同じ氏族をあげるのが妥当なところであろう。そしてその可能性のある氏族としては、以前の検討において錦部村主氏^{にしごりのすけり}をあげたことがある^⑨。その根拠は満願寺廃寺が『和名抄』錦部郷の遺称地・現在の東浅井郡びわ町の大字「錦織」と直線距離で0.8kmと近接しているということ、浅井郡には『日本三代実録』貞観16年6月29日条に見える「節婦近江国浅井郡人錦村主清常刀自」や、その同族と見られる『続日本紀』延暦6年7月戊辰条の「浅井郡人從六位上錦曰佐周興」の居住が知られ、その郡内での本拠がこの錦部郷と推測されることなどである。

この満願寺廃寺の壇越の可能性のある、浅井郡の錦部氏については、その後あらたに大阪府柏原市安堂遺跡出土資料を知ったので、ここではそれによって如上の想定を補強しておきたい。その新資料とは昭和60年度に実施された同遺跡の発掘調査において土坑6と称された遺構から、天平18年(746)の年紀をもつ木簡や平城Ⅲ期とされる多数の土器とともに出土した「益田郷戸主錦(部)□□[]」と墨書された木簡のことである^⑩。ここに見える益田郷は『和名抄』の郷名で、現在の東浅井郡びわ町の大字「益田」を遺称地とし、満願寺廃寺とは直線距離で約1.3km、下八木遺跡とは約

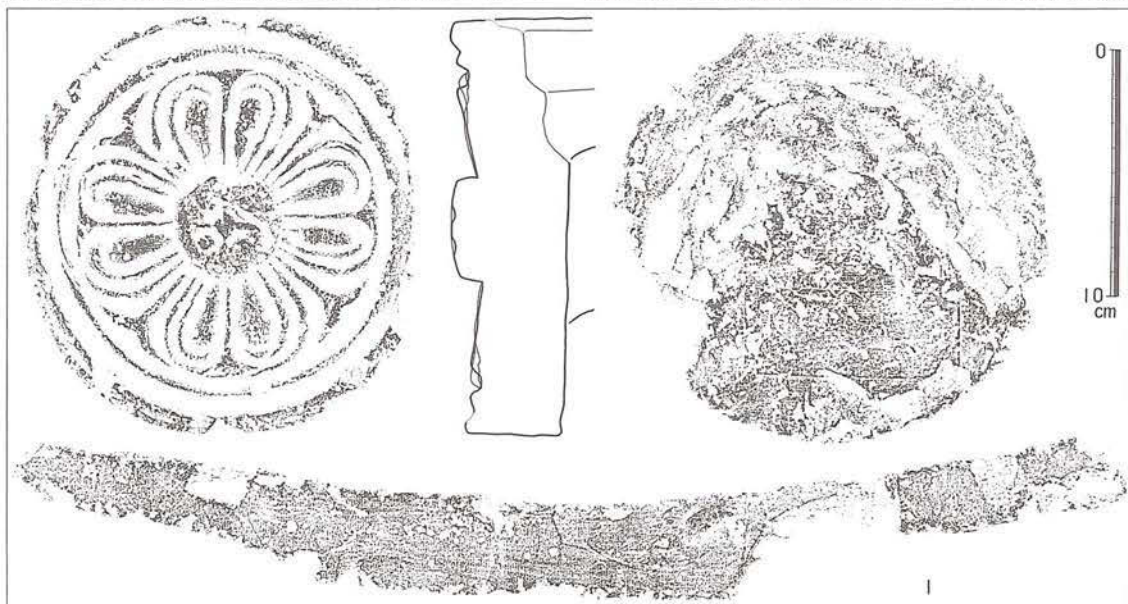


図3 下八木遺跡採集の軒丸瓦 (S=1/3)

1.2km、さきに触れた錦部郷の遺称地からは約2.2kmの位置にある。これによって満願寺廃寺や下八木遺跡は錦部郷と益田郷の遺称地のほぼ中間地域に位置し、錦部村主氏はその本拠と推測される錦部郷ばかりでなく、隣接する益田郷にも進出していたことがうかがわれる。この両遺跡がいずれの郷域に属すかは別として、以上のことを考慮すると、この地域において古代寺院の壇越となりうる可能性のあるような有力氏族としては錦部村主氏をおいてほかには考えにくいだろう。

錦部村主氏は錦綾の織成を職掌とする百済系渡来人で、もともとは河内国錦部郡、若江郡錦織郷を本拠としていた^①。安堂遺跡が所在する古代の柏原市域には、いまのところ錦部村主の居住は明確でないが、その両郡のほぼ中間に位置していることは注目される。それは満願寺廃寺の瓦類を特徴づけるもののひとつに、軒丸瓦や平瓦の凸面に施された矢羽状の叩き締めがあるが、この叩き締めは滋賀県内はもとより^②、全国的にみても類例が少ない。そうしたなかにあって、この類例が柏原市域の古代寺院に集中しているのである^③。

(北村 圭弘)

註

①早崎信一氏による拓影を、西田弘氏が写真撮影されたものが唯一の資料であった。

a. 西田弘「近江の古瓦Ⅱ」(『文化財教室シリーズ18』(財)滋賀県文化財保護協会 1977)

b. 西田弘「第4章近江古代寺院の古瓦文様」(『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989)

②大橋信弥氏、田路正幸氏の協力を得た。

③北村大輔氏の協力を得た。

④下八木地先の遺跡としては下八木館遺跡が知られるのみである(『平成2年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会 1991)。

⑤三辻利一・北村大輔・北村圭弘「満願寺廃寺出土瓦の産地」(『紀要第3号』(財)滋賀県文化財保護協会 P76~P93 1990)

⑥この木簡は本来平城京に運ばれたはずの租税に付された荷札木簡で、それが荷解されることなしに搬出されたため、安堂遺跡で出土したと推測されている。安堂遺跡は聖武・孝謙天皇がしばしば参拝した「河内六寺」のひとつで、東大寺大仏造立の契機となった知識寺に近接する(桑野一幸(『安堂遺跡 柏原市文化財概報1986-VIII』柏原市教育委員会 1986)。

⑦佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考證篇第五』吉川弘文館 1983)

⑧坂田郡近江町高溝(法勝寺遺跡)出土の平瓦に無軸の矢羽状叩きらしきものがある(注①a文献)。

⑨ただし柏原市域で見られる矢羽状叩きは、凸面にまばらに施すもので、密に叩き締める満願寺廃寺とは叩き締めの方法が異なっている。また同じ矢羽状叩きでも満願寺廃寺では有軸であるのに対し、柏原市域では無軸のものが目立つなど相違点も多く(安村俊史「安堂遺跡」(『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1984-I』柏原市教育委員会 1985))、軒丸瓦の瓦当文様にも共通するものは認められない(『特別展 柏原の古代寺院址』柏原市歴史資料館 1985)。

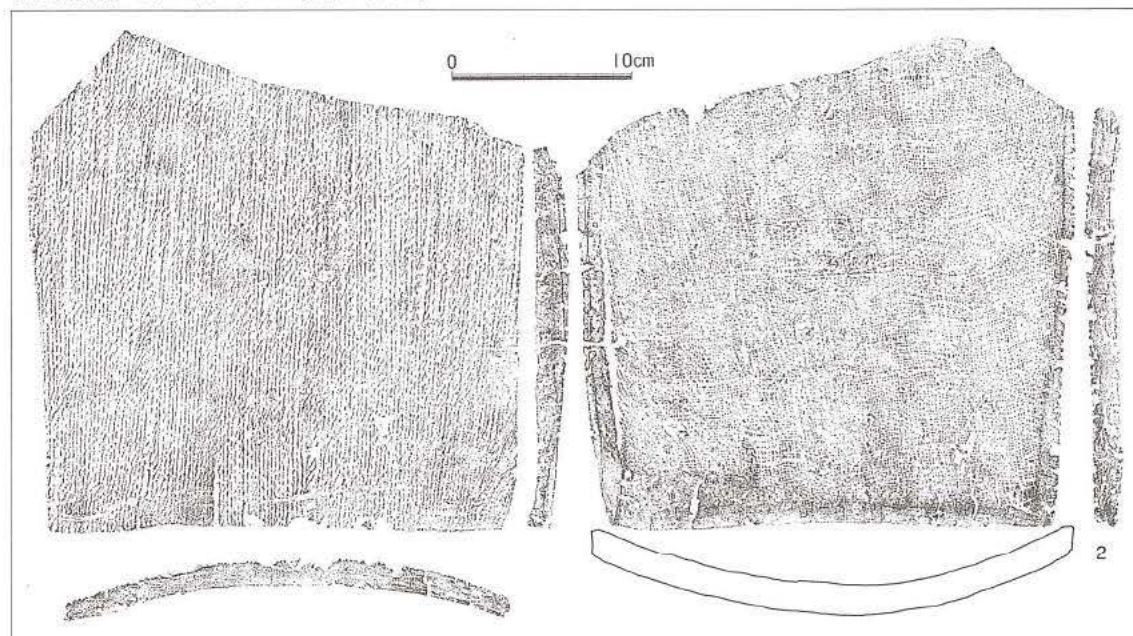


図4 下八木遺跡採集の平瓦 (S=1/4)

222. 東浅井郡湖北町上山田所在の大岩古墳群について

大岩古墳群は滋賀県東浅井郡湖北町上山田地先の小谷山北麓裾部に所在する。小谷山は戦国大名浅井氏が居城として拠った、あの「浅井小谷山城」^①のことで、元亀4年(1573)8月10日、織田信長が義弟・浅井長政を攻めるため「悉く陣とらせ」た山田山は、その山の「大づくの北」にある^②。この両山間に水源を有す山田川は、東西に狭長な谷部を西流して高時川にそそぎ出すが、大岩古墳群はその支流の千僧供川との合流地にある地藏堂の川向かいに位置する。この古墳群はこれまでに知られていない遺跡であるため、ここでは所在地名によって仮称しておきたい。

さて、その大岩古墳群は従前は少なくとも3基以上が存在したらしいが、すでに2基が消滅したといわれる。充分な分布調査をしたわけではないが、現在確認できる確実な古墳は小規模な円墳が1基のみである。略測値によると墳丘の直径は約11.5m～約12.5m、比高は約1.0m～約1.5mを測り、その中央部には横穴式石室の存在を示唆する深さ約1.1m～約1.4mの、北西に口開する落ち込みが認められる。

つぎに図示した須恵器についてであるが、これらはすでに消滅した2基の古墳から出土したとされ、地元上山田の公民館にて保管される。坏蓋1～3の法量は口径11.7cm～11.8cm、器高3.7cm～4.0cmを測り、坏身4は受部径11.4cm、器高4.2cmを測る。高坏5～8は口径13.6cm～13.7cm、脚部底径11.1cm～12.6cm、脚部高9.3cm～10.1cm、器高14.1cmを測っている。これらの形状などについて観察してみると、相対的に古相を示すものと、新相を示すものとが認められる。すなわち前者としては口縁の立ち上がり部などにシャープな印象を与える坏身4や長脚で2段透かしの高坏6などがあげられ、後者としては脚部を上下2段に区切る沈線は有すものの透かしはもたない高坏7などがあげられる。これらの須恵器はおそらく古墳の副葬品で、そうした

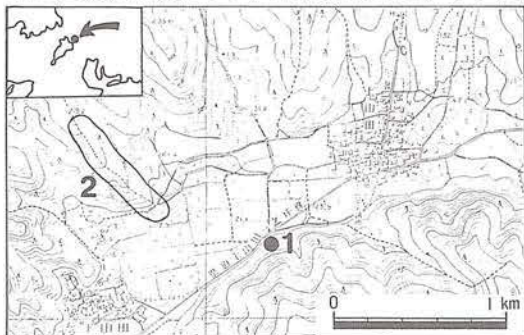


図1 大岩古墳群(1)と大塚古墳群(2)

場合、たとえ1基の古墳から出土したものであったとしても、追葬などの可能性も含めて、通常は複数の時期の所産と考えるべきだろうが、ここではさらに発掘資料ではないことなどを考慮して、一応蓋坏の法量に注目して、おおむねTK209型式の並行期を中心に考えておきたい^③。

以上のわずかな手がかりから判明する大岩古墳群の様相については、一応、6世紀後半から7世紀前半頃にかけて営まれた、横穴式石室を内部主体とする、直径12m前後の数基からなる円墳群として概括してよいだろう。今後は山田川の流域に所在する「円墳10基・横穴式石室」といわれる大塚古墳群など^④の踏査も実施していきたいと考える。(北村 圭弘)

註

①鹿苑日録 天文7年9月16日条

②信長公記 卷六 阿閉謀叛の事

③a 田辺昭三(『須恵器大成』角川書店 1981)

b 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻3号 京都大学 1986)

④滋賀県教育委員会(『平成2年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会 1991)

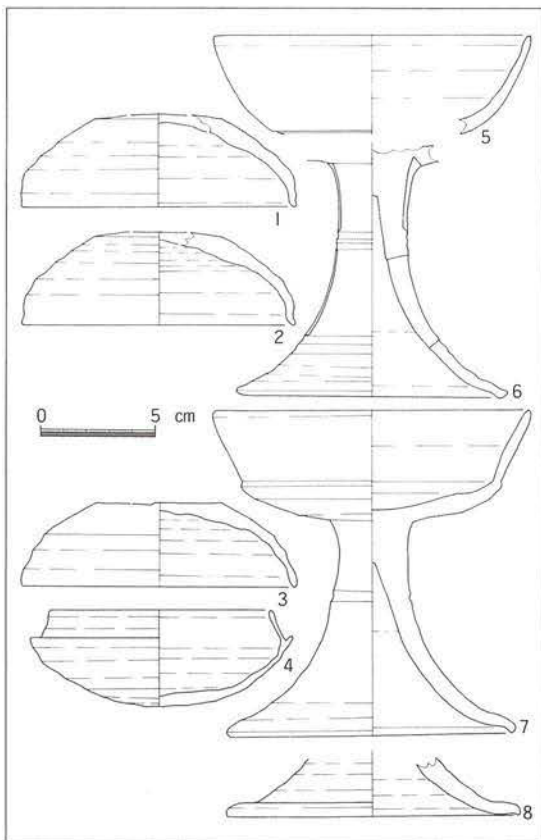


図2 大岩古墳群出土の須恵器